

# 推薦入学試験小論文検査

## 問題 I

最近、身内の者がこんな面白い経験をした。1・0～0・8あった視力が低ナトリウム血症で半分以下になり、眼鏡が合わなくなった。そこで、ある優れた眼科医に診てもらったら、「眼のレンズの中で低ナトリウム状態が起こったため視力が変わってきたのだから、血液のナトリウムが正常になれば、放っておいても視力は戻る。いま視力を調整する必要はない。もう少し待てばいいのではないか」と言ってくれたという。私はその話を聞き、「そういうことが人間の体のなかにはあるんだ」と驚いた。

こういうことがあるから、医学は面白くてしょうがない。教科書通りに行かないから医学は面白い。毎日毎日新しい実験を試みて、いろいろなことを発見するのが医学である。

以前、アメリカの科学雑誌「サイエンス」に、脳が思い違いするメカニズムを解明するためにマウスを使って実験を行った利根川進さんたちのチームの論文が掲載された。高齢者になると思い違いが多くなるのは、記憶力が落ちているのではなく、誤った記憶（過誤記憶）を形成して、それに入れ替わっているからだということを証明しようとしたものだが、これが非常に面白い。

20年、30年の経験がある医師でも、自分が思い違いをしていることに気がつかないで、間違っただけを繰り返しているということがあり得る。人間は年を取ると、若い時よりもだんだん思い違いが多くなるということを実感する必要がある。だから臨床医は博学でなければならない。内分泌学だけをやる、糖尿病だけをやる、などと狭い領域に閉じこもるのではなく、常に勉強をして、幅広い学識で患者を診なくてはいけない。そういう努力をすれば、臨床医の仕事は面白くてしょうがなくなる。

人間というものは、新発見をすると情熱が高まる。そして、新発見できるようなことは日々の中にある。しかし、人間は色眼鏡をかけているから真実が見えない。作家の曾野綾子さんは40代の時に白内障の手術をしたら世の中が変わったということを行っている。私は白内障がまだほとんどないから手術をする必要はないが、網戸を通して外の景色を見ると鮮やかな色がなくなるので、その網戸を取って真実の赤や黄色が現れた状態を想像する。そういう新発見が人のやる気を起こし、「これは面白くてしょうがない」という気持ちにさせるのだと思う。

研究者は毎日が新発見だから仕事が面白くてしょうがない。寝ないで仕事ばかりしていると、普通は疲れてしまっただうしようもなくなるのだが、研究者の徹夜はプロダクトが出てくるから疲れるということがない。疲労感がない。そういう気持ちを臨床医も持ってほしい。日々の中に臨床医学も発見があるからである。

(日野原重明 「だから医学は面白い」 日本医事新報社: 2015より改変引用)

註：利根川進：1939～、1987年ノーベル医学生理学賞受賞、現・理化学研究所脳科学総合センター長  
曾野綾子：1931～、作家。代表作に「神の汚れた手」など

問1 臨床医は博学でなければならないのは、どうしてであるか。筆者の指摘も踏まえて50字以内で説明しなさい。

問2 あなたにとって勉学において、教科書通りに行かなかった経験とその過程で考えたことを150字以内で述べなさい。

## 問題 II

欧州は、古来、多くの民族がせめぎあって栄枯盛衰をくりかえし、今もその跡が刻まれている土地である。一つの国にいくつかの民族が同居している例は珍しくない。複数の公用語（国語）のある国もある。その上、陸つづきで隣国との往き来も簡単だから、すこし極端な言い方をすれば、通りの向うからやってくる男がなに語で話しかけてくるのか、いざとなるまでわからないのが普通なのである。

異なった歴史を背負い、異なったことばを話す人たちのあいだの交流はむずかしい。複雑・婉曲な言いまわしはしばしば誤解を招く。相手の共感を呼ぼうとしてかえって怒らせることも少なくない。いきおい、交渉のしかたは自己の主張を徹底させることを第一に、くどいほど隅々まで明確に、ということになるろう。

欧州にそういうものの言い方を発達させたもう一つの原因として私が考えるのは、欧州の社会は契約社会、契約を土台として成り立っている社会だということだ。部屋を借りるにしても、荷物を送るにしても、すべてに契約書がつきまとう。これは、一つには先に述べたような人文地理的な事情にもとづくのだろうが、キリスト教の影響もあるかもしれない。とにかく彼らは暗黙の諒解でことを運ぶのを好まず、あからさまな形で契約を結び、いざというときには契約書をもとに論争によって是非を決しようとする。この習慣が、自己主張的な、くどさをいとわず明確さを追求するものの言い方を発達させたことは疑いない。

日本の事情は欧州と対照的だ。おおざっぱに見れば国じゅうが同じ民族で同じことばを話す。青森と鹿児島にことばのちがいが、気質のちがいはあるが、ドイツとイタリアの差にくらべれば問題でない。日本人同士であれば、ことばが通じることはもちろん、七面倒なことは言わなくてもことばのはしばしだけでこちらの意志も気持も相手に通じる——とたいていの人が信じている。「万事よろしく願います」という言い方がそのことの表れで、これは契約主義、逐条明確主義で育った人種には無意味語としか聞こえない。

私たちの国では四面の海が異民族の侵入を防ぎ、いわば同族だけがせまい四つの島にとじこもって鼻つき合わせて暮してきた。そこでいちばん大切な生活の心得は、異を立て角つき合わぬこと、みんなに同調することであった。交渉のしかたもこれに準拠して、自分の意見を明確に主張して正面から相手にぶつけるよりも、ぼやかした表現によって相手の意向を問ひかけ、相手がきめたようなかたちにして実は八分通りは自己の意見を通すのをよしとしてきたのである。

そういう言語環境のなかで育ってきた私たちは、論説を書くときにも、「読者に裁量の余地を残しておかなければ……」と思う。あまり断定的に書くのはぶしつけだと感じる。論文のなかのデアロウは正にその感じから生まれるていねい語なのだが、その感じは欧米人種には理解できないものらしい。彼らの世界では、丁重ということと、断定的でなく含みを残していることとは無縁なのである。

私は、自分は日本人のなかでは西欧的な考え方、感じ方を比較的よく解するほうで、時と場合によっては彼らと共通の足場で考え、感じることもできる——と信じている。

しかし、論文を書くときに「ほかの可能性もあるのに、それを斟酌せずに自分の考えを断定的に述べる」ことにはいつも強い抵抗を感じる。英語の論文の場合にはデアルと書くし、日本語の論文でもこのごろはデアルと書くようにつとめているが、それは心の中で押し問答をしたあげくのことだ。ほんとうはデアロウ、卜考エラレルと含みを残した書き方をしたいのである。これはまさに私のなかの日本的教養が抵抗するせいなので、性根において私がまごうかたなく日本人であり、日本的感性を骨まで刻みこまれていることの証拠であらう。

（木下是雄 「理科系の作文技術」 中央公論新社 2015 より抜粋引用）

問1 本文中の「無意味語」とはどのような意味か、50字以内で説明しなさい。

問2 自分が論文を書くとしたらどのような点に注意したいか、150字以内で述べなさい。